

大学教育シンポジウム 2008 の実施報告

大学教育センター 教育点検支援部

実施概要

シンポジウム副題 4年一貫教育課程の中で教養教育を追求する
日時 2008年12月25日(木)13時-18時15分
場所 茨城大学総合研究棟インタビュースタジオ
対象 大学(教員・学生)、一般(参加資格不問)
主催 茨城大学 大学教育センター

平成20年度の教養教育に関するシンポジウムが、大学教育センター主催の下、標記の通り開催された。当センターはこれまでも「茨城大学教養教育シンポジウム」と題して年に一度のシンポジウムを主催し、そのつど話題を絞って密度の高い情報交換の場を提供してきた。これら既存の取り組みによって見られる個々の話題の成熟を受け、今回、包括的視点からあらためて教養教育を捉えなおすことを意図して、「4年一貫教育課程の中で教養教育を追求する」の副題とともにシンポジウムの名称を標記の通り変更した。一般教員から講演を募集した一般セッションを中心として、これに招聘講師による特別講演、および理系基礎教育に関して特色GPに採択された試みを主題とする特別セッションを加えた3本立て構成での開催となった。以下、プログラムの順番にしたがって概要を紹介する。

特別講演は「高等学校からみた接続教育」と題し、茨城県教育庁高校教育課副参事の原篤範氏を講師に招いて行われた。大学に対し、いわゆる接続教育の重要性が唱えられるようになって久しく、高等学校における学習歴を引き継いだ教育体制確立への要請は高い。それに応えるべく、高等学校教育と大学教育の「接続」を論じるとすれば、もう一方の当事者である高等学校との間で接続へのアプローチを共有することが重要と考えられる。大学教育への接続に関して、高等学校側の取り組みや高等学校が抱える諸課題等についてより多くの知識が得られれば、大学側でもより効果的な接続教育の実現が期待できると考え、標記演題による特別講演を企画し最適と思われる講師を招いた。講演では、茨城県内の高等学校における現状と諸課題を紹介いただくとともに、課題解決へ向けての討論(質疑応答)が行われた。ご自身高等学校で長らく教鞭をとられた経験にもとづく講師の話は、幾分の本音を交えて現実味があり、高等学校との接続を大学側から考える上で示唆に富んだものとなった。なお、特別講演のさらに詳しい内容については、添付資料[1]の聴講報告を見ていただきたい。



特別講演に続く一般セッションでは、募集に応じた茨城大学教員による6件の講演が、シンポジウム副題を共通のテーマとして行われた。各々の授業における工夫やeラーニン

グの活用例の紹介、クラス内の学力分析など、講演の内容は多岐に渡り、いずれも独特の視点で聴衆の関心をひきつけるものであったように思われる。なお、各講演の具体的内容については添付資料 [2] の予稿集を見ていただきたい。係る資料については、本学教員による優れた取り組みのアーカイブ化に寄与するものとなることも期待している。

シンポジウムの最後に置かれたのは、「特色 GP としての理系基礎教育のその後—理系基礎教育の改革の試み—」と題する特別セッションである。本学の大学教育センター理系基礎教育部代表である曾我日出夫教授をセッションオーガナイザーとして、理系基礎教育部所属の本学教員による 5 件の講演が行われた。平成 19 年度特色 GP に採択された理系基礎教育部のこれまでの取り組みが、特色 GP への採択以前からの取り組みと合わせて紹介された。理系基礎教育改革の成熟にともなって新たに見えてきた課題なども話題にのぼり、4 年一貫教育課程において理系基礎教育が果たすべき役割と課題についての、より明確な認識が共有されることとなった。なお、各講演の具体的内容については、一般講演と同様添付資料 [2] の予稿集を見ていただきたい。

当シンポジウムの参加者は計 60 名で、内訳は、茨城大学から 57 名（同大学教育センターの 10 名を含む）、他大学から 1 名、高等学校から 2 名であった。

以上

添付資料一覧

- [1] 特別講演聴講報告
- [2] 大学教育シンポジウム 2008 予稿集（含最終プログラム）
- [3] 参加者アンケートの結果

特別講演聴講報告

演題：高等学校からみた接続教育

講師：原 篤範 氏（茨城県教育庁高等教育課副参事）

大学教育シンポジウム 2008 では、講師に茨城県教育庁高等教育課副参事の原篤範氏を招き、標記特別講演をお願いした。本報告書は当講演の概要を紹介するものである。

講演は以下の4つの項目について、茨城県内の県立高等学校の現状紹介・分析を中心に据えて進められた。

1. 県立高等学校における教育課程の実施状況
2. 新しい高等学校学習指導要領
3. 学力調査及び学習状況・意識調査の結果
4. 補習の必要性？

聴講者にはこれらの各項目に関する詳細な資料が事前に配布された。以下、項目ごとに概要を紹介する。

1. 県立高等学校における教育課程の実施状況

平成 14 年度以降の完全週 5 日制の実施、平成 15 年度の学習指導要領改訂などを原因として、高等学校における“実質的な”授業時間数が減少している様が具体的なデータで示された。後者は「総合的な学習の時間」設置に代表されるいわゆる“ゆとり教育”の実施を指し、情報科目の増設などもこれに含まれる。一方で、大学入試に向けての学力維持を図らねばならない高等学校の苦心の様子が併せて紹介された。学校行事や定期試験にかかる日数を削減するため多くの高校では 3 学期制から 2 学期制へと移行していること（平成 20 年度は茨城県内の全日制高校中、約 70%）、長期休業日（夏休みなど）

の実施の有無・日数が各校によって異なること、1 単位の授業時間の運用状況が様々であること（1 授業 56 分のような学校もある）、「履修」と「習得」を別とし、生徒の学力不足による留年・退学の増加を抑えていること、などがそれに当たる。また県の承認を要しない各校独自の「学校設定教科」の開設がここ 5 年ほどで 5 倍ほどに増え、各校の事情に合わせた様々な科目がますます多く新設されているとのことである（平成 14 年度は県内 27 校 87 科目、平成 20 年度は同 58 校 414 科目）。

以上のような状況では、週 5 日制やゆとり教育の当初の趣旨からして既に制度が形骸化してしまっていると言えなくもない。そこで、より実情に見合った新しい学習指導要領の策定が議論され始めているとのことである。

2. 新しい高等学校学習指導要領

平成 22 年度から高等学校教育課程表に反映される予定の新学習指導要領案（以下、新要領と略記）の紹介がなされた。新要領での大きな変更点として、主要三教科（国・数・英）の標準的な単位数の内いくつかは「削減可」とされている点、「総合的な学習の時間」に係る単位を学校長の判断により 2 単位（標準は 3～6 単位）にまで削減することができる点などが指摘された。「総合的な学習の時間」については、現在の教育課程実施状況から察するに、多くの高等学校が削減に踏み切るであろう、といった推察も加えられた。

また新要領では、「週当たり 30 時間を超えて

授業を行うことができる」ことが明記される予定であり、多くの高等学校で暗黙裡に実施されていたことに透明性を与えることになるであろう。この度の改訂では、制度形骸化からの逸脱を念頭におく当局の意図がよく伺えると言えるのではないだろうか。

3. 学力調査及び学習状況・意識調査の結果

平成 19 年 6 月、茨城県の県立高等学校の全校を対象に、県主導で初めての学力調査及び学習状況・意識調査が行われた（より詳しくは、県立高等学校の全日制第 2 学年及び定時制第 3 学年の生徒約 3,400 人を対象にした国語総合・数学 I・英語 I の学力調査と学習状況・意識調査）。このような全県的な調査は全国でみても数県しか実施歴がないとのことである。本項目では調査の結果およびそれらから浮かび上がった課題について述べられた。

学力調査では、数学の成績分布に極めて明確な二極化の傾向が見られるほか、英語では広範囲の得点帯になべて分布するといったバラツキが見られるようだ。これらの分布をもたらす原因について会場から質問が挙がったが、現状では明確な因果関係を導き出すことが困難であり、今後も数度に渡り同様の調査を行っていく（3 年ごとに実施予定）ことでより確かな分析が期待されるとのことであった。

学習に対する意識調査では、学力調査の結果との相関関係が見事に表れていると言ってよい興味深い結果が見られた。すなわち、学力試験の素点によって分けられた 5 つのグループ（学力最上位の A グループから最下位の E グループ）それぞれが示す学習に対する意識・授業中の態度・校外での学習時間などは、概ね納得できる結果であったといえる。また、高等学校の生徒の学習時間平均は 44 分（平日）であり、小学 3 年生から中学 3 年生までのいずれの学年の平均よりも低い、といった由々しきと思われる実態についても指摘があった。

4. 補習の必要性？

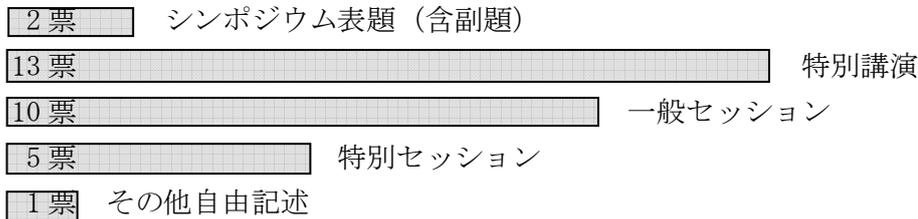
ここでは、中学校卒業生数ならびに高校進学率の変動によってもたらされた課題に焦点が当てられた。少子化に代表される理由により、中学校卒業生数は目に見えて減少している（平成 20 年の卒業生数は平成 1 年の約 60%程度）。その一方、卒業生の高校進学はほぼ平常化しており、県内生徒の進学率は昭和 30 年の 42.7%に対し、平成 19 年では実に 98.0%にのぼる。これら「中学卒業生数の減少」と「高校進学率の増加」という二つの要因により、「学生の確保」と「学力不足の学生への対応」といった容易ならざる両立が各校に迫られている現状とのことだ。また学生確保のための入試の多様化も、実質的な学力が不足した学生を受け入れる一因となっていることも指摘された。すなわち、高校においても中学からの接続を考慮した補習等を行わざるを得ない状況にある。

このような事情は大学におけるそれとまさに同様であり、大学では接続教育の必要性（補習を含む）が認識として既に定着していると言えるが、高校における中学からの接続は未だ十分に課題視されていない、との指摘があった。

以上のような諸課題を解決する上での各高校の各種取り組みでは、学力面での着地点として大学入試に対応できる力が見据えられている。その意味でも「大学入試」が高校教育に及ぼす影響の大きさが改めて認識され、その認識の下での（高大）接続教育のあり方を探ることが重要であると実感させられた。

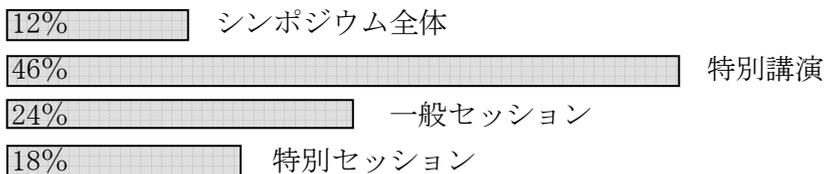
文責：梅原 守道（大学教育センター専任講師）

0 事前に関心をもった企画は（複数回答可）：



[記述]・タイトルにふさわしい内容になっているか？

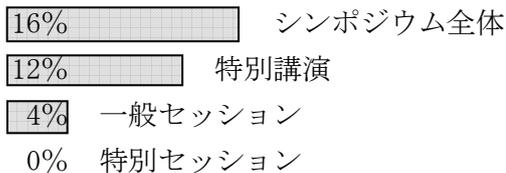
1 参加してみて、もっとも意義ふかいと感じた企画は：



0% その他自由記述

[備考 2回答者がそれぞれ2項目を指定]

2 参加してみて、改善の余地があると感じた企画は：



[備考 数値はその項目を指摘した回答者数の割合を示す]

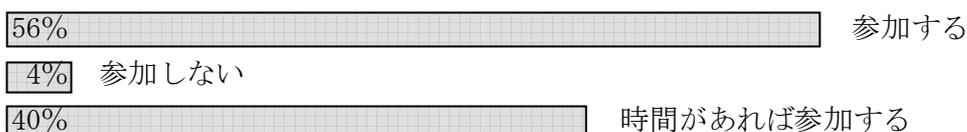
[自由記述]・せっかく招いたのであり、内容も意義あるものだったのでもう少し長い時間を確保してもよかったように思う（特別講演に対して）。時間の余裕を作るには一般セッションと特別セッションを二ヶ所で同時に行うのも一手かもしれない。

- ・参加者が少ないのはおかしい。
- ・日程。12月25日は人が集まりづらいと思います。
- ・もう少しテーマをしばっては？
- ・時間配分

3 このシンポジウムに参加してよかったと思えることは：

あった（100%） なかった（0%） どちらともいえない（0%）

4 来年も今回と同様のシンポジウムが開催されたら：



5 回答への補足、改善提案などの自由記述：

- ・いつもより早く行われたことはよかったと思う。ただ 12/25 は他行事や会議との重複が多かったのではないだろうか。
- ・他に予定があったため、特別講演のみに参加した。高校教育の制度的な面を初め、いろいろな側面を資料を駆使しながら説明され、県立高校の生徒が置かれている状況や生徒達の意識等について知ることができた。接続教育を考える上で参考になった。
- ・内容的に大変有意義と感じます。それだけに日取りが非常に残念です。日程設定の難しさは勿論分っておりますのですが…。
- ・このシンポジウムの案内（発表者、スケジュールを含む）をもっと早く出してほしい。具体的な案内がぎりぎりだったため、他のスケジュールが入ってしまい、全部出席することができなかつたので残念だ。
- ・予め、より具体的内容がはっきりしていた方がよかった。
- ・特別講演の高校の数学の成績の2極分解が興味深かった。主ゼミの植物の話も面白かった。これまでのFDより、つつこみが深い発表になっている、と思う。
- ・一般セッションでは、なぜ質疑の時間がないのでしょうか？シンポの効果半減と思います。特別セッションは時間が長い／内容をコンパクトに／他にも参考になるような内容も加える。
- ・質疑討論を各講演に対して設定して欲しい。
- ・大変興味深い発表ばかりで参考になりました。ありがとうございました。今後、もし可能であれば12月の終わりではなく別の時期を予定していただけますなら助かります。学習ができない学生は数学・物理等の科目授業の問題だけでなく勉強の仕方などを理解していないということであるなら全学的な1年生対象の基礎学習コースのようなものが必要ではないかと思われる。
- ・もう少しPRした方がいい。
- ・特別講演の講師の方にミネラルウォーター等が用意されていればよかったと思う。途中休憩が少なかったように感じた。発表用PCにマウスがあると操作がしやすいと思う。

自由記述については明白な誤字脱字を除き、原文のまま掲載した。

大学教育センター 教育点検支援部